最高学部（大学部）

2025 年度生活経営研究実習について

酒本絵梨子

生活経営研究実習とは、自由学園最高学部（大学部）1・2 年生の必修科目であり、学生が自由学園の運営に直接かかわることで、課題発見・解決のプロセスを実践的に学ぶ授業である。また、そこで得られた知見を通して社会の問題について考え、後期課程での研究活動に生かすことも、この授業のねらいの一つである。

2025 年度は、これまで別々に活動してきた「農芸」と「食」を統合し、「食・農芸」グループとして活動を開始した。これにより、実習全体は、庭園・自然環境（樹木）、庭園・自然環境（草本・灌木）、食・農芸、資源エネルギー、図書・記録資料の 5 グループとなった。以下に、2025 年度の実習の活動内容について、年度末に行われた生活経営研究実習報告会の内容から述べる

1. 各グループからの報告内容について

庭園・自然環境：樹木

庭園・自然環境樹木グループでは、学園内の樹木をはじめとした植物の手入れを行い、校内の景観や安全を維持するためのさまざまな活動が紹介された。

収穫では、春期にタケノコ、山椒、大島桜、梅などを扱ったほか、秋期以降には食・農芸グループと連携した収穫や夏みかんの収穫などを行った。整備では、羽仁もと子記念館や竹林などの手入れを行い、竹林では枯れた竹を中心に約 60 本を伐採した。また、夏休み中に発生した倒木への対応など、自然環境の変化に応じた整備についても説明された。

このほか、樹木の剪定、竹柵の修理、門松づくりなどの実践に加え、樹木の季節変化を継続的に観察するフェノロジー調査にも取り組んだ。また、新宿御苑やエコプロ 2025 の見学、初等部 2 年生を対象とした樹木についての授業など、実習で得た知識を学内外で共有する活動についても紹介された。

振り返りでは、1 年生から、道具の扱いや樹木の判別などの基礎的な知識・技術を身につけることができた一方、必要な道具の準備や報告・連絡・相談、上級生に頼らず自ら判断して活動することなどが課題として挙げられた。2 年生は、樹木の性質を知り、よく観察し、その特性を踏まえて判断することの重要性を、2 年間の実習を通して実感したと振り返った。

庭園・自然環境：草本・灌木

庭園・自然環境草本・灌木グループでは、1 年生が主に南沢キャンパス、2 年生が向山緑地や立野川最上流部などをフィールドとして、在来の野生植物とそれらが生育する環境の保全・回復に取り組んだ様子が紹介された。

1 年生は、長期休暇中も含めて継続的にフィールドを見回り、植物の観察記録、最高・最低気温、水温、地温の計測、定点撮影などを行った。また、外来種やレッドリストについて学びながら、外来種の除草や野生植物の手入れ、移植実験などにも取り組んだ。移植については、植物の生育条件を十分に考慮する必要があることなど、うまくいかなかった実践から得られた課題についても述べられた。

また、過去の観察記録と今年度の状況を比較する中で、以前確認されていた植物が今年度は確認できない事例もあった。その経験から、いつ、どこで、どのような植物を観察したのかを継続して記録することの重要性が改めて指摘された。希少な植物については、その存在を周知することが保全につながる一方、生育場所を公開することで盗掘等のリスクが生じる可能性もあり、情報をどのように扱うかについても考察された。

2 年生は向山緑地を中心に継続的な植物観察を行うとともに、都市計画公園の整備に伴う希少な在来植物の保護や植生調査に取り組んだ。過去の調査記録と現在の植生を比較しながら、人の手による管理が植物や林内環境にどのような変化をもたらすのかについて考察した。

食・農芸

2025 年度から、これまでの農芸グループと食グループを統合し、食・農芸グループとして活動を行った。報告会では、農芸に関する活動と食に関する活動について、それぞれ一年間の実践が紹介された。

農芸に関する活動では、野菜、切り花、鉢物、花壇の各部門に分かれ、野菜や花の栽培、学園行事等で使用する花や鉢物の準備、学園内で出る落ち葉や草などの資源活用に取り組んだ。野菜部門では、種まきから定植、管理、収穫、貯蔵、出荷、利用までの一連の過程を学び、今年度は新天地全体で 28 種類の野菜を栽培し、約 680kg を収穫した。

また、近年の高温への対応や収穫時期と授業日程との調整、有機栽培への移行など、実際に作物を育てる中で生じた課題についても検討された。切り花や鉢物では、栽培技術だけでなく、生産した花の利用や価格について考える機会も持った。花壇ではバラの管理などを行ったほか、学園内の植物や素材を活用したクリスマスリースを制作し、資源エネルギーグループによるイルミネーションにも参加した。

食に関する活動では、学園内で収穫された農産物の加工や調理、保存などに取り組んだ。梅や柚子などの学園生産品を利用した加工品づくりのほか、柚子胡椒、杏の種を利用した杏仁豆腐、醤油づくりなどを通して、食材の性質や加工・保存方法について学んだ。また、過去の資料を調査し、かつて学園で親しまれていた菓子を再現して学部の食事として提供するなど、食を通して学園の歴史や文化を捉え直す活動も紹介された。

今年度は食と農芸を一つのグループとした最初の年であり、報告内容も農芸と食、それぞれの活動を中心としたものとなった。今後、生産から加工、調理、消費、さらに廃棄や資源循環までをどのようにつなぎ、一つのフードシステムとして捉えていくことができるのか、引き続き実践を通して検討していく必要がある。

資源エネルギー

資源エネルギーグループでは、学園内の設備や備品の修繕、新たな設備の立案・制作など、一年間の多様な取り組みが紹介された。1 年生は、工具の扱い、研磨、アーク溶接、電子工作、自転車の解体・再生などを通して、活動の基盤となる知識と技術を学んだ。2 年生は、1 年次に身につけた技術を生かしながら、日常生活の中から課題を見つけ、その解決に取り組んだ。

年間を通して、自転車や椅子などの修理・再生、電子部品を用いた制作などを行ったほか、10 月には体操会本部の設営を担当した。この活動は、体操会当日の運営拠点をつくるだけでなく、災害時を想定した仮設拠点設営の演習としての意味も持つことが説明された。

また、学外から持ち込まれた修繕・再生の依頼にも取り組み、自分たちが身につけた技術を地域の中で生かす機会となった。秋期からはクリスマスイルミネーションの制作に取り組み、樹木グループや食・農芸グループとも協力しながら設営を行った。さらに、エネルギーについての理解を深めるため、太陽光発電について事前学習を行ったうえで、実際に設備を設置・運用している家庭を訪問し、設備や仕組みについて体験的に学んだことも紹介された。

図書・記録資料

図書・記録資料グループでは、図書館を利用する人を増やすための活動と、学園におけるできごとを記録資料として残す活動を中心に、一年間の取り組みが紹介された。

図書に関する活動では、中等部・高等部生に本との新しい出会いをつくることを目的として、読書週間に「ミステリーバッグ」を実施した。中身が見えない袋に 2、3 冊の本を入れて貸し出す企画で、図書館の教職員等にも協力を得ながら、計 40 冊、17 組の組み合わせを用意した。図書館と中高等部のラーニングコモンズで貸し出したところ、ラーニングコモンズでは約 1 時間ですべてが貸し出されるなど、多くの生徒が本を手に取る機会となった。今後については、貸出場所や選書を誰が担うかなど、企画を継続するための課題が挙げられた。

記録資料に関する活動では、2024 年度に中高が共学化したことを受け、それに先立って 2023 年度から行われてきた話し合いに関する資料の収集・整理を行った。記録資料学で学んだ、収集、評価・選別、記述・編成、保存管理、利活用という手順を実際の資料に適用し、会議の議事録や生徒への告知など、紙媒体・デジタル媒体双方の資料を整理した。

特にデジタル資料では、ダウンロードによって作成日時が変更され、いつ作られた資料なのか判別しにくくなっているものもあったため、関連する資料や学生自身の記憶なども照合しながら年代を特定した。また、できごとをまとめた

年表を作成し、それぞれのできごとと資料番号を対応させることで、後から資料を検索しやすい形に整理した。今年度中に整理できなかった資料については、今後も継続して作業を進めていくことが課題として示された。

2. 合同実習と講評

発表の最後には、各グループが協力して行った合同実習について、実習リーダーから説明がなされた。

4 月には食・農芸グループと樹木グループが合同で竹林のタケノコを収穫し、下処理までを行った。収穫したタケノコは、後日、学部の食事として提供された。また 5 月には、図書・記録資料グループと樹木グループが羽仁もと子記念館の見学と清掃を合同で行い、図書・記録資料グループが館内、樹木グループが屋根など、それぞれの専門性を生かして作業を分担した。

クリスマスイルミネーションでは、資源エネルギーグループを中心に複数のグループが協力した。樹木グループと資源エネルギーグループが竹の伐採等を行い、食・農芸グループが学園内の植物などを利用したリースを制作するなど、それぞれの活動で得た知識や技術を持ち寄り、一つの活動をつくり上げた。

最後に学部長より全体の講評があり、各グループの活動の専門性とともに、それらが互いに関係しながら学園の生活を支えていることについて触れられた。また、個々の活動をグループ内だけで完結させるのではなく、今後さらにグループ間のつながりを生かした実習へと展開していくことへの期待が述べられた。

おわりに

2025 年度は、生活経営研究実習のカリキュラムについて、履修と評価の仕組みを見直した一年であった。

これまで生活経営研究実習は、年間を通して一つの実習グループに所属し、一年間の活動をもとに成績評価を行うことを基本としてきた。これに対して 2026 年度からは、春期・秋期それぞれで履修と成績評価を完結させ、半期ごとに成績をつける仕組みに変更した。これに伴い、春期に履修したグループを継続しながら、秋期から別のグループも加えて履修することも可能となる。

生活経営研究実習では、一つの分野に継続してかかわることで、知識や技術を積み重ね、その場や活動についての理解を深めていくことを大切にしてきた。一方で、一年間同じグループに所属することを前提とした仕組みでは、年度の途中で、別の分野にも触れてみたいと考えた場合にも、別のグループの活動に参加することは難しかった。今回の変更は、こうした継続的な学びの意義を残しながら、半期を一つの学びの区切りとして位置づけ、その時点で学生が改めて自身の関心に応じて活動を広げることを意図したものである。異なるグループを履修することが可能になることで、一つの分野を深く学ぶだけでなく、異なる対象や方法を持つ実習を経験し、学園の生活を複数の視点から捉える学びへと広がっていく可能性もある。今後の履修状況や学生の学びを継続してみていきたい。

さらに今年度は、上述のとおり、これまで別々に活動してきた食グループと農芸グループを「食・農芸」グループとして統合し、実習全体を 6 グループから 5 グループへと再編した。

履修・評価の仕組みとグループ構成の双方を見直した 2025 年度は、これまで生活経営研究実習が培ってきた継続的・実践的な学びを大切にしながら、学生の関心や学びの広がりに応じて、より柔軟に実習を選択できるカリキュラムのあり方を模索し始めた一年であった。

今後は、こうした制度上の変更が実際の学生の選択や学びにどのような影響を与えるのかを検証するとともに、それぞれのグループで深める専門的な学びと、グループや分野を越えて生活全体を捉える学びをどのように両立させていくのか、引き続き実践を通して検討していきたい。

参考文献

神明久 2025「2024 年度生活経営研究実習」『自由学園年報』第 28 号